

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
日本画	教授	岡田 眞治	卒業学生の展覧会を多く開催した。活躍の場を与えることで販売にも寄与し、支援ができたと思う。 キワニスクラブの講演会では、経済同友会の方々と交流し、大学見学や講演などの計画を立てた。 東邦高校と東郷高校美術コースの卒業制作展では、講評に参加し、本学への関心を高めることができた。
日本画	教授	井手 康人	公募展の作品が足立美術館賞を受賞する等、研究成果は評価を得ていると思う。
日本画	教授	清水 由朗	教員としての活動に関し、積極的に大学に貢献できるよう努めたが、目に見える成果としては今後の切れ目ない活動にかかっているといえる。
日本画	准教授	吉村 佳洋	日本画の制作研究においては個展や公募展への発表を通じ、自身の研究内容を客観的に考察する事が出来た。第76回春の院展では春季展賞(郁夫賞)を受賞する事が叶い、研究の成果が上がっている。 今回の受賞を今後の制作にも活かせるよう研究を重ねたいと考える。
日本画	准教授	岩永 てるみ	研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献共に当初立てた自己の計画を概ね達成出来たと考える。
日本画	准教授	阪野 智啓	創作活動では個展の開催とともに、長年のシリーズ「源氏物語」を納めることができ、ひとつの到達点となった。一方で院展では新画風に挑戦しているが上手くいっておらず、今後の課題を残した。研究ではそれぞれ順調に推移しており、他大学や研究者との交流も順調に進展し、派生研究で新たな外部資金を獲得できた。
油画	教授	阿野 義久	今年一年間は研究分野において精力的に動き、発表回数こそ前年度より少ないがその内容は充実していた。 その結果として社会貢献の分野において幅広く社会とのかかわりを持つことが出来たと自覚している。
油画	教授	倉地 久	研究・発表・教育・運営・社会貢献に対して、コロナ禍にありながらバランスよく努力し本務を遂行できたと考えている。特に、学部長・研究科長・教研審メンバーとして、大学運営と業務に昨年より一層深くかかわり、助力できたと考えている。特にコロナ対策に関しては、換気環境の確保や教育・研究環境の維持に尽力できた。また、国際交流に関しても自己の教育・研究をより深める成果があったと考えている。
油画	教授	額田 宣彦	・研究活動～目標を達成、研究を深めることができた。学生研究アトリエが狭く拡張の必要性を感じた。 ・教育活動～ゼミ、作品講評会、討論会、レクチャー等を全学年に渡り実施。学生の自主性、思考力、実践力を育めた。 ・大学運営～当初計画より業務が大幅に増加しストレスを感じた。特に長寿命計画工事では美術学部建物全体を中心に担当することになり時間を取られ研究活動に支障があった。次年度は研究とのバランスを可能であれば配慮したい。 ・社会貢献～「GROUND」会合、「ボイス+パレルモ」展関連イベント～対談「画家が語る画家」等に参加
油画	教授	井出 創太郎	10月に予定していた「落石計画」は新型コロナウイルス感染症を鑑み中止としたが、岐阜県飛騨市種倉集落で開催した展覧会「光射す器 種倉の影」を修士(美術)総合研究Ⅱ、Ⅳの課題とするとともに、自らも出品作家として作品を設置・公開した。研究成果の発表・教育活動という点では実りある年度となったといえる。来年度においては、新型コロナウイルス感染症の状況を見据えつつ、女木島MEGI HOUSEでの展覧会、落石計画、及び本年度開催した種倉での展覧会の開催を模索し、実現できるよう精進する年度としたい。
油画	准教授	高橋 信行	コロナ禍も影響し研究発表の機会は無かったが、制作については新たな展開に進むことが出来た。 来年度以降は展覧会の充実を図りたい。

油画	准教授	白河 宗利	創作研究の発表においては、Specce O'NewWall（韓国/ソウル）より出品予定だったアートフェア（高雄/台湾）がコロナウイルス感染拡大のため出品見送りとなったが、「Collection 展」（HRD FINE ART/京都）で当初計画に無かった発表を行った。専門である絵画の技法材料研究においては、当初計画に無かった受託研究3件（名古屋市美術館、愛知県美術館、目黒区美術館）で新たな知見や成果が上がった。その一方で、理論研究や外部から依頼された業務、大学運営の比重が大きくなりすぎている感があり、来年度からは創作研究とのバランスを取りながら進めていく必要がある。
油画	准教授	岩間 賢	研究活動①は国際芸術祭の出展作家として関与した。研究活動②③④は、これまでの成果が認められ文化庁や自治総合などから複数の事業採択を受けた。研究活動⑤は東京オリンピック・パラリンピックのリーディング芸術文化プログラムとして、東京都美術館で展示を行った。研究活動⑥⑦⑧はCOVID-19の中での新しい教育研究の様式をつくりあげ、展覧会やアートプロジェクトを遂行した。大学運営では、入試・広報委員として大学案内づくりに取り組み、名古屋工業大学との連携事業にも注力した。社会貢献では、文部科学省中国政府奨学金審査委員に加え、岐阜県白川町、千葉県市原市、茨城県取手市のAIR審査員をした。他、小規模特認校の教育モデルづくりをはじめ講義なども行った。
油画	准教授	大崎 宣之	主な活動として文化庁新進芸術家海外派遣制度（文化庁芸術家在外研修制度）によりシュトゥットガルト美術大学にて研修をおこなった。作品発表として、グループ展4件（国内2、海外2）の展覧会に参加、発表をおこなう。コロナ禍の状況での海外での研究は大変な面も多かったが、社会状況を鑑みた十分な研究をおこなったといえる。社会貢献活動としてアーティストトークとワークショップ、名古屋市文化振興事業団事業運営委員などの活動をおこなった
油画	准教授	猪狩 雅則	入試委員では入試の円滑な運営を目指し、適宜発言、発案でできてきたと感じている。専攻運営に関しては専攻会議への参加など積極的に関わったと思う。学生の指導は、相変わらず難しさを感じているが、学生の特性を見極めながら、対応できてきたように思う。
油画	准教授	安藤 正子	本年度は、コロナという事態の下で、引き続き教務委員の仕事に追われた一年でした。研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献の全てに於いて、これ以上のことはできなかったと思います。来年度以降も引き続き積極的に取り組みたいと思います。
油画	准教授	平川 祐樹	総じて目標達成することが出来たが、来年度はさらに多くの新しい情報を取り入れ、これまで以上に研究活動に力を入れていきたい。
油画	准教授	横山 奈美	今年度から愛知県立芸術大学で教員をすることになり、模索の一年でした。研究に関しては今まで行ってきた制作からの地続きですが、教育、大学運営については先生方や学務の方々に助言を頂きながら無事に一年を終えることができました。来年度も、柔軟な姿勢で様々な活動や運営に携わっていきたくと考えております。
彫刻	教授	神田 每実	現地調査等を含むプロジェクト（授業含む）の実施に対するコロナ禍の影響は極めて大きい。現時点では、実施時期の変更等を含めた工夫によりこれを実現し、成果を示しているとの評価が出来ると思う。が、学外におけるプロジェクトや授業は、都市や山村等で行われている社会（生活）が教室となるのであるから、他大学等の対応や地域の環境や安全対策の状況も含めて、一元的な対応ではない、柔軟な対応、マネジメントが必要であると、現場での活動を通して実感をしている。遠隔授業の実施に端を発する他大学との課題等の共同開発や提供は、遠隔・ネットワークであるからこそ可能となる学生個人による課題に実施管理と集中力の発揮、成果等に関する情報の紹介・共有や、異なる環境で授業展開を試みる教員同士による課題検討の機会の発生など、従来に比べ解放・拡張度の大きいFDの効果を実感させる。
彫刻	教授	中谷 聡	第84回新制作展（国立新美術館、京都市京セラ美術館）をはじめ、第8回花とみどり・いのちと心展（国営昭和記念公園）に出品すると共に、第29回UBEビエンナーレ現代日本彫刻展や第8回日本芸術センター彫刻コンクールにも入選し、研鑽を深めることができた。変革期を迎える大学運営においても、専攻長として積極的に情報収集に努め、情報発信すると共に、大学運営業務の遂行と学生の教育活動の充実を図ることができた。

彫刻	教授	高橋 伸行	ゼミなどで、ソーシャリーエンゲージドアートの実践の現場を体験する機会をつくるよう努めた が、新型コロナウイルス感染拡大に阻まれる場面が多かった。彫刻表現の分野がもともと社会的 事象との関係性が深く、「病者の身体をめぐる彫刻表現 その社会的位置づけと表現技 術の研究」という自ら立てた研究は、この社会的状況への問いでもある。次年度は国際 芸術祭に参加するので、学生とともに実践の実態を体感できるようなプログラムを工夫した い。
彫刻	准教授	竹内 孝和	コロナ禍であったが東京での個展やドイツで滞在制作をしバイラムライン市立シュタッフ ェルフースギャラリーでドイツ人作家と2人展を開催する事が出来たことは、大いなる収穫とい える。また、ドイツでの展覧会のドキュメント写真やインタビューを掲載したドイツ語・日本 語、2か国語のカタログを作成し、日本語は主に私が邦訳した。教育活動や大学運営も 良好な成果が得られたと感じている。
彫刻	准教授	森北 伸	・自身の目標に対して、概ね達成した。
彫刻	准教授	村尾 里奈	今年度は、国際交流事業と複数の展覧会企画を立案した。学生たちの海外の大学との 交流の場を広げるため、韓国ソウル市立大学との交流協定締結を実現に導くことがで きた。また来年度以降に実施する「コロナ禍における国際交流彫刻展」を含む4つの彫刻展 のうち3つの実施を現時点で確定させることができた。新彫刻棟検討会議および新カリキ ュラム検討部会では、彫刻専攻の将来のあり方について入念な検討を行った。
芸術学	教授	小西 信之	今年は専攻主任となり、休暇中の教員がいる中で、非常勤の先生を特別に複数依頼 し、新人の先生も加わり、加えて専攻全体の一大引っ越しがあり、てんてこまいの一年で あった。その中で、労務管理表を作って仕事分担の不均衡がないように目を配り、常勤担 当教員不在の学生へのケアに留意し、かつ引っ越しの詳細なプランニングを行うなど、自分 の研究はどうしても後回しとなった。それでも無事大きな問題もなく専攻を運営できたのは 良かったと思う。
芸術学	准教授	本田 光子	本年度は感染症の第五波・第六波のあおりを受け、古美研旅行の旅程を組み直したり、 対面から遠隔授業へ切り替えたりと授業関連で多くの工夫を余儀なくされた。加えて博物 館実習や、休職に入った教員のサポートを、教育の質保持および学内業務の面で担い、 研究時間が圧迫されている。外部資金を複数獲得できたため、来年度は研究時間を捻 出したい。委員会は特に入試の安全な実施のため、感染症対策を検討している。
芸術学	准教授	金子 智太郎	新型コロナウイルス感染症の流行のさなかに始まった新しい環境で、計画の遂行のために 多くの方から助力をいただいた。目標はある程度達成できたものの、反省すべき点も少なく ない。
デザイン	教授	関口 敦仁	今年度も感染対策のため、展覧会や学会等のイベントの対応の変化や状況変化が多く 発生したが、中止せずに企画イベントが開催することはできた。制限は多いが、その中で実 行可能なことの多くができた年であった。教育上は学生の立場に立って、教育サービスを もっと充実させる必要があるとあらためて考えさせられた。
デザイン	教授	水津 功	令和3年度は様々な意味で転換期となった。研究面ではデザインのマネジメント、意思決 定プロセス、概念構築が進んだ。教育では芸術教育の一般的価値に注目し、新しいデザ イン教育へのチャレンジがあった。大学運営ではCMP2021策定、長寿命化計画の基本 設計などのビッグプロジェクトをまとめた。社会貢献では、地方自治体の都市計画、景観、 公園の分野で会長や委員長を務めた。また尾張旭市と協定を結び事業を受託した。
デザイン	教授	柴崎 幸次	2年間、様々な面で、コロナの影響を受けているが、次年度から5年間、科研費の基盤A (データサイエンスによる紙の道の解明—量的・質的調査とAI多面的解析に基づいて —)に採択されたことは大きく、ここ数年の研究活動も一定の成果があったものと総括し ている。
デザイン	教授	石井 晴雄	全て計画通り達成できた。 特に長久手市大学連携事業については、学生の積極的な参加もあり、成果があった。
デザイン	准教授	今尾 泰三	本年度はコロナ禍の中であったが、研究・制作面では十分な成果があったと思う。中でも 自身の研究の要である音楽とアートやグラフィックデザインとのコラボレーションがうまく成さ れ、結果としてオリジナルCDを完成出来た事は自身にとって大きな進展であった。音楽学 部の先生方、学生の方達との交流が図られ企画が達成できた事は喜ばしい事と考えており、 協力して頂いたさまざまな方達にとでも感謝している。

デザイン	准教授	森 真弓	今年度は、昨年度に引き続き、社会及び地域連携を含めた社会貢献活動と、実際の教育プログラムへの反映を行った。また、来年度に発足する新専攻の準備に関わる各種活動（特に入試体制の確立、広報など）に尽力した。
デザイン	准教授	夏目 知道	コロナ禍においても可能な範囲で目標にむかって積極的に概ね実行することができた。
デザイン	准教授	佐藤 直樹	コロナ禍が続く社会状況の中、一部の社会貢献活動に延期や中止などの判断をせざるを得ない案件があったことは残念だった。たとえこうした事態の中にあっても、社会に貢献できる具体的な活動方法や、計画・目標の設定方法についてのあり方を検討・実施していく必要性を痛感した。
デザイン	准教授	本田 敬	社会連携授業の成果（学生グループによる提案）と研究室の研究内容を合わせ、コロナ禍にもかかわらず今年度は3回の大きな展示会で成果発表をすることができた。対外的に発表することで学びは大きく、反省点の洗い出しはもとより、より拡大した研究につながる連携も獲得できた点でも、非常に収穫の多い年にする事ができたと感じている。
デザイン	准教授	春田 登紀雄	22年より、新体制となるデザイン専攻の新カリキュラムを大幅に改定しました。時代の変化に合わせて、学生自身が将来のデザイン業界を先導できる、競争優位性のある授業内容となっております。来年度より、デザイン専攻の創造性教育の成果を、企業・自治体・他大学の外部の方へ積極的に発信して参ります。
デザイン	講師	望月 未来	研究・教育・社会貢献の各項目において概ね目標を達成することができた。そんな中でも対外的な活動の制約は少なからずあったため、次年度は特に外に発信する活動についてさらに充実させていきたい。
陶磁	教授	梅本 孝征	年度を通して研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献において、多くの実績と成果を得ることが出来た。 特に秀でた成果として公募展での受賞、陶磁専攻「芸術表現コース」の始動などが挙げられる。
陶磁	教授	長井 千春	本年度は教育中心の1年となった。陶磁専攻に新コース「芸術表現コース」を始動し、「陶磁と建築」「陶磁と色彩」「陶磁とガラス」「陶磁と音楽」の4課題を実施した。また、自身の研究室所属の学部3名、博士前期課程1名の卒業制作と修了制作、博士後期課程3名を指導し報告書を完成させた。神戸財団による受託事業は6年目に入り、第3回CLDA報告書が完成させた。2021年度を一区切りとし、2022年度に向け新企画を検討した。その結果、日本にある芸術大学の陶磁領域における教育と学生作品交流展の開催を決定し、運営メンバーを陶磁専攻全教員6名に再編し実施準備を開始することとした。
陶磁	教授	崔 宰熏	着任一年目である本年度は意欲的な目標設定をし、その目標達成のために尽力した一年でした。特に教育活動では新しいカリキュラムとしてデザインシンキング手法を取り入れチームワークによる授業や社会との繋がりを取り入れた授業などを展開することで学生たちの向上心を高めることができました。研究活動では常にデザイン制作する姿を学生たちに示すことを心がけました。その結果学生たちとのコミュニケーションが深まり現場での指導が効果的に行われることにも繋がりました。夏休み中には韓国の優秀大学の陶磁科5箇所を訪問し陶磁教育の現場を視察し、教授たちとの交流を深めることができました。これらのことを踏まえて更にステップアップしていくよう努力していきたいと思っております。
陶磁	准教授	田上 知之介	昨年度、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い十分な研究成果が得られなかった研究活動において、予定していた研究活動を実現させることができました。また、教育活動においては授業内容の刷新を試みました。入念な授業計画に基づいた丁寧な指導を行い、教育成果が出始めています。
陶磁	准教授	佐藤 文子	令和3年度の計画に沿って各事項ともに積極的な取り組みを行うことができた。特に研究活動においては、日頃の制作成果として個展を開催した。障害者福祉支援活動としては、素材への可能性を模索することができ、陶芸教育の取り組みと陶磁器における色彩や原料素材についての研究を行うことができた。次年度においても引き続き、学生個々の個性を引き出すこと、陶磁原料や釉薬分析による多岐にわたる陶芸表現の可能性を探求していきたい。
陶磁	准教授	小枝 真人	令和3年度の計画に沿って各事項ともに積極的な取り組みを行うことができた。とくに研究活動においては数多くの展覧会での発表が出来、積極的に取り組み概ね良好な成果を得た。 次年度は教育活動において、より専門的な教育出来る様、他大学の陶磁教育機関などと連携協力して陶芸教育の可能性を模索していきたい。

教養	教授	清道 正嗣	保存修復研究所の研究員 2 名に、分光測定法の指導・データ解析のアドバイス・発表の校閲をした。これは教育か研究協力のどちらに入れるか不明だが、これも併せて全体としては普通の活動ができたと思う。
教養	教授	石垣 享	今年度は、学内での委員会運営に多くの時間を割かなければならなかった。その状況下でも、2019年以前よりは劣るものの昨年度よりは多くの研究活動を行うことができた。最も困難であったのは、本学での授業運営であり、感染対策の為に授業開始の20分以上前から教室内の環境整備を行った。計画以上の成果を上げることができた。